

ケルンの中世教会堂建築

——平信徒空間の視点から（3）

愛 宕 出

聖 ゲ オ ル ク

大司教アンノ 2 世（1056—1075）が参事会を創立，その期の建築年代は1059年から1067年の献堂までとされる（図27）。三廊平屋根バシリカで，東内陣は三廊形式。東内陣下にはクリプタがあり，従って内陣は床高である。翼廊は半円形に終わる。西にも内陣を持つ対向内陣形式である。入口が身廊西端の南北にあり，これは以後も変わらない。

7世紀と考えられる旧教会堂の主祭壇の位置を継承して，交差部と内陣の境界に十字架祭壇が建つ¹¹⁸⁾。この事実から，内陣のみが確定した聖職者空間であり，翼廊は身廊と同一の床レベル，かつ十字架祭壇前にあたるから，身廊と同様に平信徒を許容したと考えられる。教会堂東には参事会建築があり，創立時から東の回廊が東内陣を取り囲んでいた¹¹⁹⁾。北には教区教会聖ヤコブ St. Jakob がある。身廊西端の南北の入口のうち，北入口は聖ヤコブに直結し第二次大戦の戦災まで16世紀の通路建築が存した。南入口も戦災に至るまで磔刑像を持つ16世紀の玄関（Potikus）が存した。これらから両入口とも平信徒用入口と考えられよう。

参事会員の聖職者席は東内陣にあり，戦災で消失した14世紀の聖職者席は内陣の南北に各6席設けられていた¹²⁰⁾。当初の配置も大差ないであろう。参事会員の入口については詳細は不明だが，参事会建築が教会堂東に直結しており，入口は内陣か翼廊を推測させる。14世紀の改修で内陣南の付属建築（Portikus

1170年頃)の上階から南翼廊東端を通る高い通路が設けられている¹²¹⁾。これはやはり旧来から参事会員が教会東部に入口を持っていたことを示すだろう。

12世紀半ばから全空間がヴォールト化される(図28, 29)。教区教会聖マウリティウスと並んで、ケルン最初の全体がヴォールト化された教会堂である。詳しくはわからないが、身廊と翼廊が一層平信徒化したことを示す可能性を考えておこう。また、それに伴い東の内陣は三廊間のアーケードが埋められ隔壁化し、内陣両側空間は聖具室と宝物庫になる¹²²⁾。内陣はいわば長内陣化し、かつてより閉鎖的な空間になったと言うこともできる。

1180年頃から西内陣が改築される(図28, 29)。1200年頃財政難で中断し、上方の塔建築は実現しないが地階は新機軸の独創的な構想である。W. マイアー＝バルクハウゼンは聖ゲオルク西内陣を聖使徒教会東三葉形内陣の角形空間へのヴァージョンとして位置づけている¹²³⁾。ただし後者が聖職者空間であるに対し、聖ゲオルクは平信徒空間、この場合参事会配下の平信徒(familia)のための教区教会である。東端には教区祭壇であるカタリナ Katharina 祭壇が位置し、中央には洗礼盤がある。建築主導者かつ寄進者はおそらく参事会筆頭のイスフリット(Dechant Isfrid)だとされる¹²⁴⁾。

これらが何を意味するのかを考える前に、参事会組織と平信徒の関係を見ておこう¹²⁵⁾。参事会は小規模で参事会員は多くて20名。彼らは貴族層ではなく市民層の出身者であり、常に教区民から一名の参事会員が出ている¹²⁶⁾。つまり当初から参事会は教区との結びつきが大きい。他方「すでに12世紀末には教区と聖ゲオルク参事会との係争が伝えられており、教区の相当な自己意識を証している。1237年には教区管轄権 Patronatsrechten への教区民の参与が達成される。さらに教区は富裕な商人の住むヴァイトマルクト Waidmarkt などの地域を含んでいる」¹²⁷⁾。つまり一方で参事会と教区民は当初から深い関係にあるが、同時に教区民の影響力の大きさゆえに両者の係争も見られるのである。

聖ヤコブの教区は11世紀半ば聖ゲオルクと同時に設立され、創立時は参事会配下の教区民（familia）の教区教会であった¹²⁸⁾。教区の教会堂も同時に建設された平屋根バシリカで詳細は不明だが後にも建築活動が続いている¹²⁹⁾。しかし街区の都市化によって、教区は地域的性格の教区となっていく。おそらく familia のための教区教会として建設された聖ゲオルク西内陣は、聖ヤコブが地域的教区教会化した結果 familia が場を失い、いわば玉突き式にここへ追い出されたのであろう。従ってこの建築は参事会の主導なのであり、形からも参事会組織の空間支配の形、つまり聖使徒教会の三葉形内陣のヴァージョンという形をとったのであろう。ただこの建設を不可避にしたのは教区平信徒の力の増大なのである。またおそらく聖ゲオルク身廊はこの時点ですでに教区民の平信徒的空間となっており、familia の教区教会をそこへ置くのには建築主導者である参事会に抵抗があったのだらう。

参事会長（Propst）関係の建築もおそらくこうした背景と関わる¹³⁰⁾。参事会長の居館、祭室、塔から成る参事会長建築は1200年頃教会堂から北東の敷地に建てられる¹³¹⁾。つまり西内陣と同時期に建設されている。A. フェアベークは特にその塔に注目して、中断した西塔建築の代償として建てられたと解釈しているが¹³²⁾、背景から推測するとそうではない。この時期多くの参事会教会で参事会長と参事会との財産分離が行われる。これは参事会長が参事会組織の支配権を失うことを意味している。聖ゲオルクではこの財分離が1171年という早い時期に行われている。従って参事会長建築の建設は、参事会長が教会内で自己の場を失った結果であらう。固有の祭室（Georgskapelle）を持つというのも参事会長が教会堂内での場を喪失したということに対応しよう。上に見たようにここでは地域的性格の教区になっても、参事会組織は他の参事会教会より平信徒的性格が強く、早い時期の参事会長（Propst）排除はそれと関連しよう。従って参事会長建築が物語るのはやはり、階層的に言って上からの支配力よりも下からの圧力の方が大きいということである。

以上の如く聖ゲオルクの諸関係は非常に複雑である。しかし全般的に平信徒の影響力増大が建築に反映しているということは証されたであらう。

グロス聖マルチン

オットー朝期の大司教ブルーノが創立した参事会教会だが、10世紀末修道院組織に変わる。その時期の建築は古代ローマ（2世紀）の三廊ハッレの倉庫建築（Horrea）を一部再使用したものであるが不明点が多い¹³³⁾。

現教会堂（図30, 31）は1150年から1250年頃までの継続的建設工事によるものだが、主に身廊東端上階の壁の調査から、途中で何度も構想変更を受けていることがわかっている¹³⁴⁾。先ずその経過を略記する。以後の論の便宜上、各段階をA B C Dとする。

A段階は1150年の火災後。東三葉形内陣を建設し、西には三塔の正面を建設開始する（あるいは西建築はアンノ期（1056—1075）のものをそのまま残している可能性もある）。身廊は単廊の構想である。

B段階で計画を変更する。身廊は単廊から三廊のトリビューン構成に、中央廊は東第一ベイ（側壁と上方半円ヴォールト）のみが建設される。西に続くベイは平屋根の構想である。南側廊の建設はさらに西へ進行している。1172年、東三葉形内陣を献堂。

C段階は1185年の火災後の計画変更である。東第一ベイのトリビューンは身廊への開口が閉鎖され、身廊はトリフォリウム Triforium と高窓の三層構成になる（現在のものに近い）。この段階で身廊はなお木造平屋根、西建築は依然として当初からの三塔の正面である。

D段階は最後の変更であり、ここでほぼ現在の形になる。1230年頃に身廊がヴォールト化される。西建築はこれまでの三塔の建築が取り壊され、単純な玄関建築（Vorhalle）に変えられて1250年頃完成する。ただし西三塔のうち南塔のみは南接の教区教会聖ブリギダの塔として残される。身廊はC段階と同じく三層構成、しかしより新しい形に改められる¹³⁵⁾。そしてリブ・ヴォールトが架される。交差部塔は一層分追加される。

教会堂の北には回廊と修道院建築、南には教区教会聖ブリギダ St. Brigida が接している¹³⁶⁾。入口については先ず、身廊北（西から）第二ベイと北翼廊西北の二つの入口は明らかに修道士の通路である。それに対して平信徒入口は西正面である¹³⁷⁾。従っておおよそ修道士＝北、平信徒＝西（南）の図式である。修道士の聖職者席は17世紀まで交差部にあり、主祭壇はその東、つまり内陣東翼部にあった¹³⁸⁾。元来の位置もそう変わらないはずである。聖職者席は交差部、あるいは交差部＋身廊東ベイとしていいだろう。

聖マルチンは教区教会聖ブリギダと接しており、建築年代も聖ブリギダと関連すると見られている。つまり一般に、聖ブリギダはA段階に並行して建設されたとされる。その根拠は聖マルチン南側廊外壁の不規則性である。つまり、聖ブリギダと接する南外壁は既存の聖ブリギダ北壁にあわせたために不規則な形をとった、と言う解釈である。しかしこれに対して、G. ゼッレンは次のように指摘している。「(古代ローマの) 二つの南倉庫建築 (horrea) は、後に部分的に教会堂の南側壁の基盤として使われた。この壁 (教会堂南壁) のへこみの理由もまた、そこにすでにあった聖ブリギダ教会ではなく、ローマの倉庫建築の位置ゆえだと思われる」¹³⁹⁾。つまり、聖ブリギダをA段階建設とする必要はないのである。さらに聖マルチンでは12世紀後半まで教区のミサがなお行われている¹⁴⁰⁾。つまりこの時点で、聖ブリギダの建築はなお存在しない、と考えてもよい。また二教会の並行した建設については、どちらかと言えば聖マルチンが優先されたと考えるのが自然であろう。こうした点から、聖ブリギダの建築は少し後へ時代を下げる事が出来る。つまりB期、あるいはC期（1170年から1180年代？）と考えてもいいだろう。

そうした前提でもう一度建築の各段階を振り返って解釈してみよう。

A段階は単廊＋東三葉形という形である。この規模の教会堂で単廊形式はこの時期には非常に珍しい。この形の手本として指摘されているのはシュヴァルツラインドルフ Schwarzhendorf, ボン Bonn, Münster の長内陣、聖ゲレオンの長内陣である¹⁴¹⁾。シュヴァルツラインドルフは大司教アルノルト Arnold

II が自らの私有地居館に私的礼拝堂かつ自らの墓所として建設した教会で(1151年献堂)¹⁴²⁾、実際その単廊十字平面が中世初期以来の支配者の特権空間の典型的な形であることは上に見た通りである。ボン、聖ゲレオンの長内陣という内陣部分が当教会堂全体の祖型であるというのも、この教会堂全体を参事会組織が空間支配しようとする傾向を示している。つまり、教会堂全体が一つの閉鎖空間の形を取り、全空間が参事会の独占空間になるといった趣である。

B段階で身廊が三廊化され、トリビューン構成で構想される。トリビューン構成が教区教会のモチーフであることは聖アンドレアスで見た。また先ほど述べたようにこの時点で聖ブリギダは未だ建てられていない、としてもよい。つまり聖マルチンは教区教会の機能をも考慮しなくてはならなかったのである¹⁴³⁾。

C段階でトリビューンが廃止される。これは聖ブリギダがこの時期に建設された、あるいは建設が決定されたため、教区教会の機能が不要となったためである。身廊の三廊間のプロポーションを見ると、アーケードアーチと側廊が高く、また側廊が狭いために、身側廊一体感が出てくる。つまり身廊はA段階の単廊形式に似て全空間が一体化され、東三葉形にこれまでになく同化する¹⁴⁴⁾。聖職者席から全教会堂が空間支配されると言ってもよい。D段階では最終的に身廊西壁にもニッチが配されるが、これによって全空間がニッチで取り囲まれ、空間の輪郭が明確に把握できる閉鎖領域が出来上がる。

D段階では西塔を廃し、逆に東交差部塔の構想が拡大され、外観でも西より東を優先する形になる。西塔の代わりに2ベイの長さ、つまり教会堂身廊の約半分の長さの玄関建築が付加されるが、これは教会堂内部全体が修道士占有の傾向が強いために、その代償として西に新たに設けられた平信徒用空間であろう。

以上のような解釈を裏付けるとも言えるのが、身廊北西部のあり方である(図32)。身廊北壁の西端には後期ゴシックのニッチ跡があり、ここには元来十字架祭壇があった。そしてその上にあった1509年の磔刑像は今でもここに置かれている¹⁴⁵⁾。さらにそのすぐ東には別のニッチとキリスト埋葬の彫刻が残

っている。磔刑像すぐ前に現在ある洗礼盤は13世紀前半のもので、おそらく聖ブリギダで1510年に新しい洗礼盤を作った際に旧のものをここへ移したのだ、とされている¹⁴⁶⁾。12、13世紀の状態はわからないが、この部分が平信徒教区民のための場であったということは推定できる。しかし十字架祭壇が、しかも中世末になって身廊西端にあるというのは、教区民の場が極端に追いやられていると言える。つまり逆に教会堂の修道士占有の傾向が強かった、ということの間接的に証していよう。

このような聖職者の全空間支配がなぜこの教会で起こったのか、しかも教区は都市化の進んだ平信徒の経済力ある地域である。可能な答えは修道院組織であること、またそれゆえ例えばシトー会の修道院運動の影響などがあるかもしれないこと、そして教区教会聖ブリギダの役割などに求められようが、正確にはわからない。

聖クニベルト

聖使徒教会、聖セヴェリンと並んで教区教会機能を持つ参事会教会で、参事会創立は8世紀あるいは9世紀と推定されている。現建築（図33、34）の開始は1190年頃¹⁴⁷⁾。1227年頃完成の東部分（内陣と翼廊）の後¹⁴⁸⁾、1230年頃に当初の構想が変更され、身廊から西翼廊へと進行して、1247年に教会堂全体の献堂が執り行われる¹⁴⁹⁾。1261年西塔が完成。

教会堂北には参事会建築と回廊があり、北翼廊に参事会員の入口がある。平信徒の主入口は西であろう¹⁵⁰⁾。西翼廊が教区教会として機能していた。他方聖職者席は身廊の東ベイにあり、ここは身廊他部分より床高になっている。東部分全体も身廊より床高でおそらく平信徒には開かれていないだろう。ただし、南翼廊ニッチには familia の洗礼盤が壁画とともに現在も残っている。主祭壇は東アプシス内である。

当初の建築主導者は参事会長（Propst）テオデリヒ・フォン・ヴィート Theoderich von Wied¹⁵¹⁾。東部分は当初の構想では、交差部の東西幅がもっ

とあり、また西に続く身廊はもっと低いものが計画されていた。従って交差部から見ると、南北翼廊とはもっと空間的つながりがあり、東部分は一体的で自足した集中建築的空間となるはずであった。そしておそらく交差部西には聖職者席の障壁 (Lettner) があった¹⁵²⁾。例えば聖使徒教会の東内陣に近いと考えればいだろう。

1230年頃の構想変更後は聖職者席が交差部でなく身廊の東三分の一を占めることになるが、この形はこれまで考察した例にはなかった¹⁵³⁾。他例では(オットー朝の聖パンタレオン以外)すべて東は長内陣あるいは三葉形内陣の形をとる。それに対して聖クニベルト東内陣はマーストリヒト、聖セルヴァティウス Maastricht, St. Servatius の西ホール内陣 (Westchorhalle) を東に転用するという異例な形である¹⁵⁴⁾。当初の東部分は確かに交差部の東西幅がもう少しあり集中空間的であるとはいえ、聖職者席が不足していたのではないかと思われる¹⁵⁵⁾。さらに長内陣の閉鎖的充足感や三葉形の集中的構成による空間支配の感覚がここには欠ける。こうした形の選択はおそらく参事会長テオドリヒの個人的専断であり、計画変更はそれに対して参事会組織の意向が反映された結果だと考えられよう。テオドリヒはなるほど以後の献堂を執り行い¹⁵⁶⁾、当組織と関係を持ち続けるが、1210年に参事会長を退いており、参事会長と参事会との紛争の後1237年には両者の財産分離が行われている。つまりこのあたりの時期に、組織主導者が参事会長から参事会へ移行していると考え得るのである。

計画変更によって聖職者席は身廊東ベイへ進出してくる。この計画変更は、東部分が聖職者専用空間として身廊から分離された形から、東部分と身廊が一体化した形への変化でもある。またグロス聖マルチンと同様、高いプロポーションの側廊によって身廊三廊の一体感があり、全空間が明確な輪郭で把握できる空間である。つまり聖職者席から教会堂全体が空間支配される、といった形になる。しかしおそらくこの変更は、変更時に教区教会として西翼廊の建設を決定したがゆえに可能となったものである。つまり1230年頃の変更は平信徒の意向をも反映しているだろう。

東部分（内陣と翼廊）にステンドグラスが残っており、年代は1220年～1230年頃とされる¹⁵⁷⁾。内陣ステンドグラスの寄進者像には聖職者ととともに多くの平信徒も含まれるが、ガラス全体の配置が単一の構想でなされている。これはG. ヴァイラントによると、個々の寄進者の意志が個別に建築に反映されるこれまでのあり方によって、建築事業を一手に担当する組織がケルンで初めて確認できる例である¹⁵⁸⁾。判明する寄進者が参事会員と平信徒であることから、上に見た状況を反映していると言えるだろう。つまり一方で参事会長の影響力の後退、他方で参事会と平信徒の共労を間接的に表しているのではないか。従って1230年頃の構想変化は参事会長から参事会プラス平信徒への主導者の変化と言い換えうる。さらにこの推論を進めれば、こうした二勢力の共労を媒介したのが新しく組織された建築局（*fabrica*）である、とまで言えるかもしれない。

だとすれば、身廊の空間支配も参事会プラス平信徒が共同で享受すべきものだということになる。そしてその場合の平信徒の焦点は聖職者席西障壁前の十字架祭壇である¹⁵⁹⁾。

東内陣南に *familia* の洗礼盤があり、これは西翼廊の教区教会とは直接関連しないが、聖ゲオルクにおけると同様の推論も可能だろう。つまり身廊における平信徒の圧力によって本来参事会員の場であった東翼廊に *familia* の洗礼堂が追いやられた、という推論である。

以上のまとめ

以上でおおよそその特徴が浮かび上がってきたであろう。オットー朝的空間の典型は聖パンタレオンの単廊教会に見られるごとく、閉鎖的な空間支配の場を形成する。そしてそれは世俗権力の私有教会と通じた形である。都市の発展による平信徒の影響力の増大という圧力に対して、聖職者席は新しい場へ移行するが、その場合身廊を放棄するという代償を多少とも払って自発的に特権空間を形成する。典型的な二つの形は三葉形内陣と長内陣である。三葉形内陣では

交差部を空間占有し、同時により拡大された場を空間支配しようとするが、空間占有されない場である翼部に平信徒の浸食をまねく。他方、長内陣はほとんど独立した一個の教会堂というべき閉鎖的空間を形成するが、身廊の断念がより明確で、その分閉鎖的で内向的なあり方である¹⁶⁰⁾。

ところで、外部の圧力による閉鎖的な場の形成というあり方は、自足的空間の形成が同時に外部空間を生み出すという意味で、ほとんど普遍的なあり方だとも言える。例えばオットー朝における全教会堂の空間支配も、それ自体は閉鎖的であり、同時に世界をすべて外部として定義している、と言ってもいい。

また平信徒空間が次第に優勢になるという傾向は否定できないものの、歴史的な変化が必ずしも図式的ではないことは、一見時代に逆行するかに見える次のような例でも確認しておこう。聖アンドレアスでは身廊＝平信徒、側廊＝聖職者という形が推定された。聖ゲオルクでは集中的（閉鎖的）空間が聖職者ではなく平信徒空間として形成される。グロス聖マルチンと聖クニベルトではロマネスク最終期になって身側廊一体化した聖職者占有志向を表した空間が見られるが、これは中世初期の形の再来とも言える。

ではこうした諸変化を促した平信徒がその主体である教会堂、つまり教区教会はどうなっているのか。結論を先に言えば正反対のあり方を示す、しかし最終的には参事会教会、修道院教会の閉鎖域志向とつながっている。

教 区 教 会

以下では教区教会の中でも最大規模で最も特徴的な聖コロンバ St. Kolumba を中心に見ていく¹⁶¹⁾。大聖堂参事会管轄下の聖コロンバは、ケルンの中心部に位置し経済力ある平信徒が力を持つ教区で、当教区は1212年に司祭選出権を得、15世紀前半には大聖堂参事会から完全に自立化する¹⁶²⁾。

9世紀の単廊建築は11世紀半ばに三廊バシリカに拡大され、12世紀末には南側廊の追加によって四廊化され、同時に北側廊と南外側廊上にトリビューンが付けられる¹⁶³⁾。ケルンの教区教会で最初のトリビューン建築という可能性も

ある。このトリビューン建築への改築は1212年の司祭選出権獲得の契機とも考えられている¹⁶⁴⁾。15世紀から16世紀にかけて（1457年から1530年代まで）（図35, 36, 37）、北側廊を新しく二廊で建設、続いて南側廊も二廊の新建築で建て直し、残る中央廊にも手を入れる。つまり5廊建築として更新されるが、これも南北外側廊および西にトリビューンを持つ。

以上の様に教会堂建築はおおよそ、12～13世紀の建築と15～16世紀の建築との二つに分けて考え得るが（以下では第一期、第二期と呼ぶ）、両期とも四廊、五廊という多廊形式で同時に平面も不規則であるが、これは教区教会の多くに共通する特徴である¹⁶⁵⁾。有力な教区教会であるほど市の中心部に位置し、従って街区内に建ち土地に制約が生じるのである。また他例でもよくある形が、完全な改築ではなく古い部分を中核として増築していくという方法である。

そしてその際、増築部分は旧の部分と連関づけるべく工夫される。聖コロンバ第二期の場合、旧建築のまま残る中央廊ではアーケード柱を半分の数に減らし（図35）、新側廊へ開くアーチ開口を大きくとって各空間は最大限つながりを持つようにされる。また身側廊空間の一体化を計って側廊ヴォールトは身廊の方が高くされている（図36）。こうした土地の制約からくる不規則平面、新旧部分の併存といったあり方の結果として、内部空間は無秩序で絵画的ともいえる効果を持つことになる（図37）¹⁶⁶⁾。

次にトリビューン形式は12世紀後半以後、ケルンの教区教会のトレードマークと言ってもいい¹⁶⁷⁾。その用途についてはK. G. ボイカースが主に三つの点について考察しているのをそれをまとめるに留める¹⁶⁸⁾。教区教会のトリビューンは十分な入口や広さから恒常的な使用があったと考えられるが、信徒の収容力増大というのは聖コロンバには当てはまっても、小教区の教会堂には当てはまらない。聖ウルスラのごとき一部の人々の特権的空間というあり方については、教区教会でもドイツ他例で寄進者である有力な家族の私的使用の実例がある。私的礼拝堂（Privatorien）の一種として使用されるわけである。また市の行政末端組織とでも言うべき世俗的集会（Sondergemeinde）¹⁶⁹⁾という機能は証されないが考え得る。というのも有力な教区の教区教会はすべてトリ

ビューンを有し、小教区の教区教会は有さない、という形でぴたりと一致するのである。

次に私的礼拝堂と寄進者について聖コロンバ第二期の場合を見ておこう。ヴォールトの紋章から、北二廊はすべてヨハン・リンク Johann Rinck の寄進、そして南二廊は複数の有力家族の寄進による、と考えられている。また北第三ベイの礼拝堂はゴダルト・ヴァッサーファス Godart Wasserfaß の寄進になる。このヴァッサーファス礼拝堂と教会堂北東のマリア礼拝堂はそれぞれヴァッサーファス、リンク家の家族礼拝堂および墓所として機能する¹⁷⁰⁾。

しかしマリア礼拝堂は、別の有力家族ダス Dass 家も寄進によって墓所として使用しており¹⁷¹⁾、使用者が可変的であることを示している。また教会堂北東部を占めるマリア礼拝堂は空間的には孤立しておらず、祭壇が二つと聖体容器 (Sakramentshaus) が元来から置かれていて、機能上も完全な特権的占有空間であったとは思われない¹⁷²⁾。他方ヴァッサーファス礼拝堂はすでに15世紀末には洗礼堂として使われている¹⁷³⁾。これらのことから、教区教会では特定の平信徒の寄進による私的礼拝堂も、いわば平信徒空間の圧力で機能的、空間的に教会堂空間に吸収される、という傾向があると考えることができる (機能的に固定し、空間的に自立化した私的礼拝堂は、例えば参事会教会聖マリア・イム・カピトールの二つの礼拝堂に見られた)。その原因は第一に都市内立地からくる土地の不足、つまり平信徒の収容という要求であろう。当初は私的空間として使用されてもすぐに共有空間として機能し始めるのである。上に見た聖ウルスラのマリア礼拝堂もそうしたことを伺わせる例である。

この傾向はしかし私的閉鎖的空間がなくなるということを意味するわけではない。中世末には礼拝形式が私的な形へ変化する、と言われる。つまりこの時期には公共的空間といっても増加する祭壇や祈念像に向かう形で基本的には私的な場だともいえるのである。礼拝の個人化は一面で私的礼拝堂の閉鎖空間を形成してきたし、その点の中世初期以来の閉鎖空間と変わらない。教区教会の開放的空間はその閉鎖空間が極小化し微分化された結果であり、閉鎖的な私的礼拝堂はその過程の一段階だと位置づけうるだろう。

そしてこの個人化された空間は、現象面では一般に中世末のハッレ形式において言われる均質空間という形をとることになるだろう。ケルンの教区教会の場合、それはトリビューン形式においてであるが、ある意味ではこの場合の方が三廊等高のハッレよりも純粹に均質空間を形成している。つまり絵画的という語にも含意される、より無秩序で空間輪郭の不明確な形を生じさせる。またトリビューンは上階空間にも身を置けるという意味で、水平方向のみならず垂直方向をも等方向化する。つまり中世末期の典型的空間は無限定な均質空間なのである。閉領域が個人の内面に極小化されることで現象空間は全て外部として定義され、無意味化されることによって抽象的に把握される無限大の均質空間となる。図式的に言えば、トリビューンで見られた教会空間の世俗的使用はこの側面に対応しよう。

建築過程も同様のことを示している。つまり増築しながら中央へ開いていくのだが、空間の輪郭（外周壁）を解消しながら更新していくのである。外部を作りながら捨象していくのでない、最初から外部が存在しないのである。立地との関係で見ても、聖コルンバをはじめとする都市内の教区教会は、町並みと共存し（塔以外）自己主張はしない。

最後に上に見たロマネスクの参事会教会、修道院教会と比較しよう。そこでは平信徒の圧力により聖職者空間は空間支配の場を志向する。輪郭を持った空間、境界を持ち従って外部を形成する空間である。それに対して平信徒空間そのものである教区教会の空間は境界を持たない無限定な空間を志向する。この二つは閉鎖空間、開放空間という形で対照的なあり方を示している。しかし両者が連続的なものであることを見逃してはならない。つまり中世初以来の閉鎖空間志向が個人の領域に微分化されて教区教会の均質空間が生じるのである。そしてこの両者はともに、自己と世界との連続性を認めず、（聖職者集団や自己という）閉領域を極度に特権化しようとする。そういう意味で中世ドイツ建築全般を（自己と世界の媒介となる）身体性を欠いた独我論的空間と呼ぶことができる。

註

- 118) A. Verbeek “St. Georg” (Stsp 1 1984) p. 258 W. Schäfke KRK 1984 p. 76 おそらく内陣奥に主祭壇があったろう。
- 119) A. Verbeek 1984 p. 260
- 120) C. Kosch “Die Stiftskirche St. Georg” (Weyer 1994) p. 168—169
- 121) C. Kosch 1994 p. 170
- 122) C. Kosch 1994 p. 174 註5。
- 123) W. Meyer-Barkhausen 1952 p. 41— なおアンノ期の西内陣の機能はまったく不明。
- 124) Isfrid の墓らしきものが西内陣で発掘されている。また西内陣南 Portikus も彼による。A. Verbeek 1984 p. 261
- 125) 以下は基本的に次の論からまとめたものである。T. Diederich 1984 p. 33—
- 126) W. Schäfke KRK 1984 p. 78
- 127) K. G. Beuckers 1998 p. 290
- 128) K. G. Beuckers 1998 p. 23
- 129) K. G. Beuckers 1998 p. 290
- 130) Propst を参事会長, Dechant を参事会筆頭と訳した。Propst が参事会の支配権を失う結果 Dechant が参事会の実質的首位に立つ。Propst と参事会の財分離については以下に詳しい。T. Diederich 1984
- 131) A. Verbeek 1984 p. 265
- 132) A. Verbeek 1984 p. 265
- 133) R. Lauer “Groß St. Martin” (Stsp 1 1984) p. 415— H. Fußbroich “Die ehemalige Benediktinerkirche Groß St. Martin zu Köln” (Rheinische Kunststätten 301) 1989 p. 6—
12世紀写本の絵画資料と発掘資料が復元材料。南北に走る壁が発掘されており、この壁はクリプタ西壁あるいは内陣障壁とされる。そしてその壁の中央に祭壇の基盤がある。H. Fußbroich 1989 はこの祭壇を教区祭壇としている。
- 134) R. Lauer 1984 p. 417—
- 135) トリフォリウムは二重壁体化した echte triforium になり、高窓層にニッチが追加される。
- 136) 聖ブリギダは1821年から取り壊される。R. Lauer 1984 p. 435 K. G. Beuckers 1998 p. 206—
- 137) さらに北翼廊北端(軸上)に同時期建設のベネディクトス祭室 (Benediktuskapelle 後の Schatzkammer) へ開く入口がある。また南翼廊南西の入口は不明だが上階通路へ通じており、おそらく修道士専用の入口であろう。身廊南に聖ブリギダへ

- 直接開いた入口が想定されていたが、その存在は発掘で否定的になった。 K. G. Beuckers 1998 p. 206
- 138) G. Sellen “Die Abteikirche St. Martin” (Weyer 1994) p. 132
- 139) G. Sellen 1994 p. 131
- 140) 修道院長ゴットシャルク期 (1169—1179) K. G. Beuckers 1998 p. 206
- 141) R. Lauer 1984 p. 422—423
- 142) G. Streich 1984 p. 552—
- 143) ただこの仮説では、A段階からB段階への変更の理由は説明できない。
- 144) この現象は一般的にはフランスの影響が現れる時期の時代的傾向とも言える。
- 145) R. Lauer 1984 p. 432
- 146) H. Fußbroich 1989 p. 26
- 147) 建築開始を遅くして、1215年頃とする場合もあるが、M. Grafによれば壁中に残った梁材の年輪年代学的分析から1190年が推定されており、ここではこれに従う。
M. Graf “Theoderich von Wied (um 1170—1242) und seine Einflußnahme auf die Baukunst an den Stätten seiner Wirksamkeit” Das Münster 1988 Heft 4
- 148) 以下では東部分完成を1215年頃としている。U. Krings “Die Stiftskirche St. Kunibert” (Weyer 1994) p. 185
- 149) 一般にはこの時点で西翼廊がなお未完とされる。W. Schäfke KRK p. 162 では西翼廊も完成、この時西塔を初めて構想した、とする。
西翼廊については、その形、教区的機能ともども聖使徒教会の影響が明らかである。
- 150) 回廊は現存せず、北翼廊から回廊南翼への入口は現在では宝物室 Schatzkammerへ通じている。
なお教会堂の諸入口と周辺の立地の関係ははっきりしない点が多い。以下に一応説明しておく。教会堂西入口前には中世の付加になる玄関建築 (Vorhalle 1830年取り壊し) がある。これは平信徒入口だろう。身廊北最西ベイの入口 (現在の主入口) は聖使徒教会の当初の平信徒入口の位置と同位置、しかしこの位置に参事会建築がかかっていたかもしれず、その場合は参事会員用入口となる (例えば聖セヴェリンで教区司祭の入口と考えたのとも近い位置である)。身廊南中央にも入口があるが、教会堂南は壁で囲まれた不入権 Immunität 領域らしい。しかしだからといって平信徒がそこへ入ることができなかった、とは言えないだろう。なお参照すべき図は、Mercator 1571 のもの (K. G. Beuckers 1998 Abb. 1 p. 19) およびHogenberg 1572 のもの (K. G. Beuckers 1998 Abb. 288 p. 360)。
- 151) 当地の有力な家系 von Wied 伯の出自で、1196年～1210年に当参事会の Propst 職にある。1212年からはトリアー大司教。聖クニベルト建築の礎石、1226年、1227年

の献堂は彼による。

- 152) M. Graf 1988 p. 297
- 153) 聖ウルスラでは男子参事会員の聖職者席が身廊と言える場所にあるが、その位置は交差部とも解釈できるし、女子参事会員の主なる聖職者席は西上階にある。
- 154) 参事会長テオデリヒと関わるこの背景については M. Graf “Der Ostchorbau der Stiftskirche St. Kunibert zu Köln” Das Münster 1987 Heft 2 M. Graf 1988
- 155) 聖職者数については、15世紀に30名から24名に減少するということがわかっている。従ってこの時期の参事会員は30名程度と考えていいたろう。T. Diederich 1984 p. 28
- 156) 註151) 参照。
- 157) Ch. Machat “St. Kunibert” (Stsp 1 1984) p. 327
- 158) G. Weilandt “Kölner Auftraggeber” (Ornamenta Ecclesiae 2) 1985 p. 366—
こうした組織は一般的には *fabrica* の名で同時代文献に現れる。
- 159) 祭壇については Ch. Machat 1984 p. 326— に詳しいが、十字架祭壇には触れていない。U. Krings 1994 p. 189 によると元来の祭壇の特定はできていないらしい。
なお本来の教区教会機能を持つ西翼廊について、簡単に既知事項を列挙しておく（特に Ch. Machat 1984 p. 312 K. G. Beuckers 1998 p. 363 参照）。教区祭壇は聖体容器（*Sakramentshaus*）とともに南翼にあった。1400年頃には教区聖具室（*Pfarrsakristei*）が南翼東に建てられている。教区の鐘は中央塔でなく、南翼上の鐘塔（*Dachreiter*）にあった。
- 160) 三葉形でかつ長内陣と同じく完全に閉鎖的な形の例がマインツ Mainz 大聖堂西内陣（*Trikonchos*）である。年代は1200—1239年。ここではさらにしばらくして（13世紀半ば）翼廊から内陣内部への通路が新たに付けられるが、これは一旦平信徒空間である身廊へ出て障壁 *Lettner* から内陣へ入るのを避けた、という極めて内向的な形だと解釈できる。F. Arens “Der Dom zu Mainz” 1982
- 161) この教会堂は第二次大戦で焼失し、現在ではほんの一部が残存するに過ぎない。
- 162) E. Hegel “St. Kolumba in Köln” 1996 p. 54, 57 F.-J. Verscharen “Die Pfarrkirche St. Columba” (Weyer 1994) p. 220 によると教区民の人口は1435年に8,000人。
- 163) K. J. Beuckers 1998 p. 250 は12世紀末、E. Hegel p. 44—45 は13世紀前半とする。
- 164) E. Hegel 1996 p. 54 教区民が教会建築に参加することを契機にして、*Patronatsrecht* を持つ修道院や参事会から教区教会が自立化するという同様の過程はシュヴァーベン地方でも指摘されている。K. J. Philipp 1987
- 165) 聖コロンバと最も類似するのが St. Johannes Baptist である。K. J. Beuckers 1998 p. 282—

- 166) 「増築部分と比べてかなり狭くて高い中央廊は、アーケード幅を大きくしたにもかかわらず、新しい建築部分よりも小規模な部分しか持たない。このことがしばしばあまりに否定的な形での教会堂の評価に導いた。ハッレ風の無方向性と厳格な東への方向性との組み合わせが不統一に働くからである。しかし教会堂のこの緊張こそがその絵画的内部効果を生み出したのである。」 (K. J. Beuckers 1998 p. 255)
- 167) トリビューン関係の文献は註54) を参照。
- 168) K. J. Beuckers 1998 p. 49—
- 169) 教区単位の政治機構については以下に詳しい。E. Hegel 1996 p. 41—
- 170) E. Hegel 1996 p. 119 なお私的礼拝堂関係の著作が近年出ている。A. Grewolls “Die Kapellen der norddeutschen Kirchen im Mittelalter. Architektur und Funktion” 1999
- 171) E. Hegel 1996 p. 117
- 172) Beuckers によると聖コロンバのマリア礼拝堂は一般の家族礼拝堂と異なり、法的に完全には私有化されていない。Beuckers p. 174 また聖コロンバのマリア礼拝堂と同様に平信徒による家族礼拝堂の文献でわかる最初の例とされる教区教会 St. Laurenz の Sylvesterkapelle もやはり閉鎖空間ではない。Beuckers p. 172
- 173) Beuckers 1998 p. 253

図版出典

- 27—31, 33 “Köln: Die Romanischen Kirchen” Stadtspuren Bd. 1 1984
- 35—37 K. G. Beuckers “Köln: Die Kirchen in gotischer Zeit” Stadtspuren Bd. 24 1998
- 32 H. Fußbroich “Groß St. Martin zu Köln” Rheinische Kunststätten Heft 301. 1989
- 34 W. Meyer-Barkhausen “Das große Jahrhundert kölnischer Kirchenbaukunst” 1952

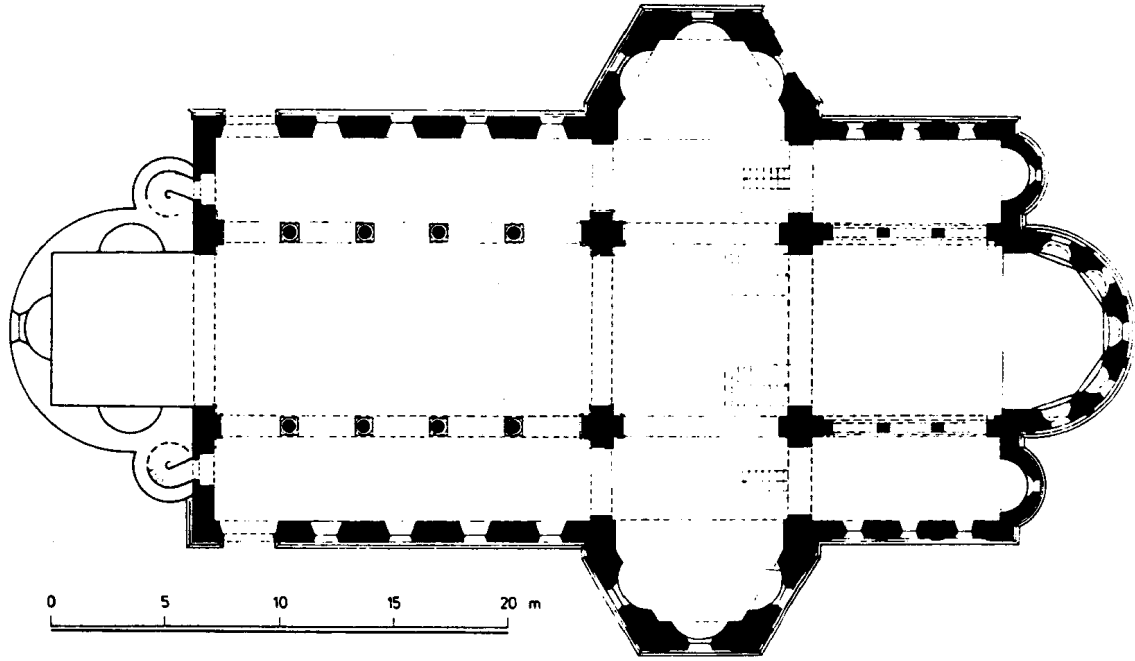


図27 聖ゲオルク アンノ2世の建築平面

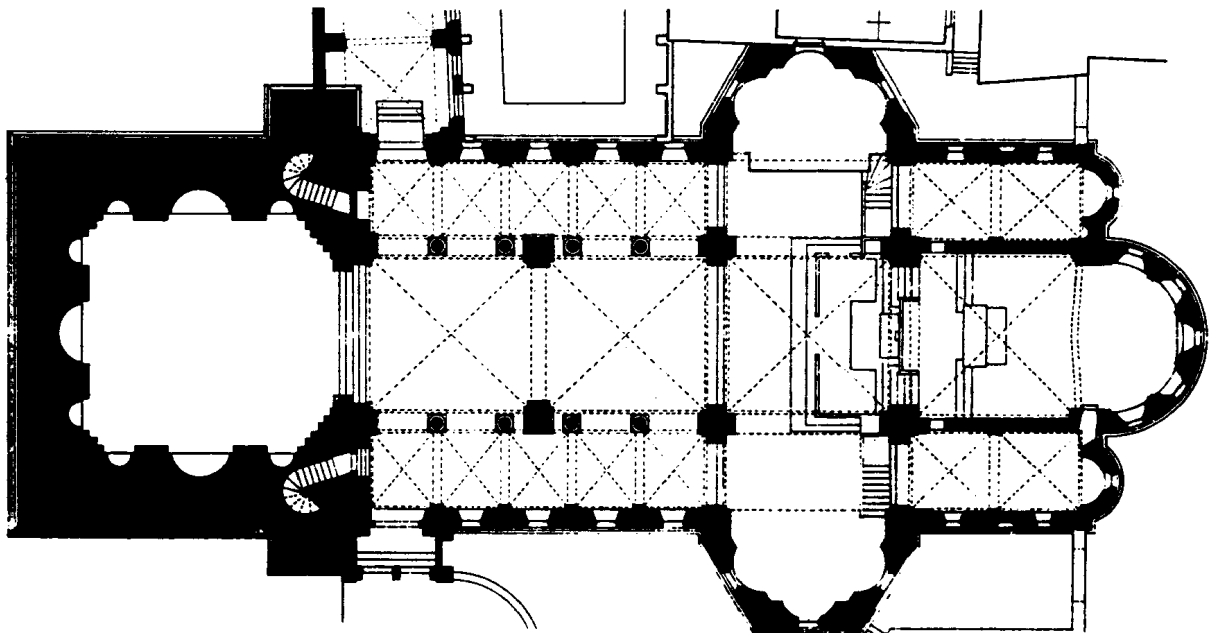


図28 聖ゲオルク 平面

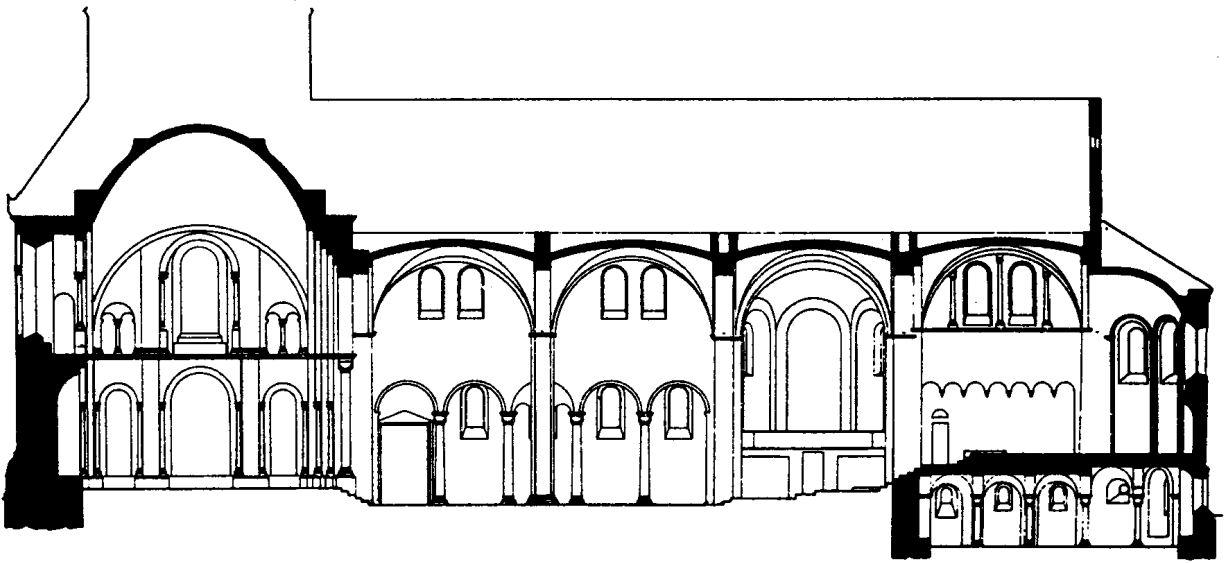


図29 聖ゲオルク 立面

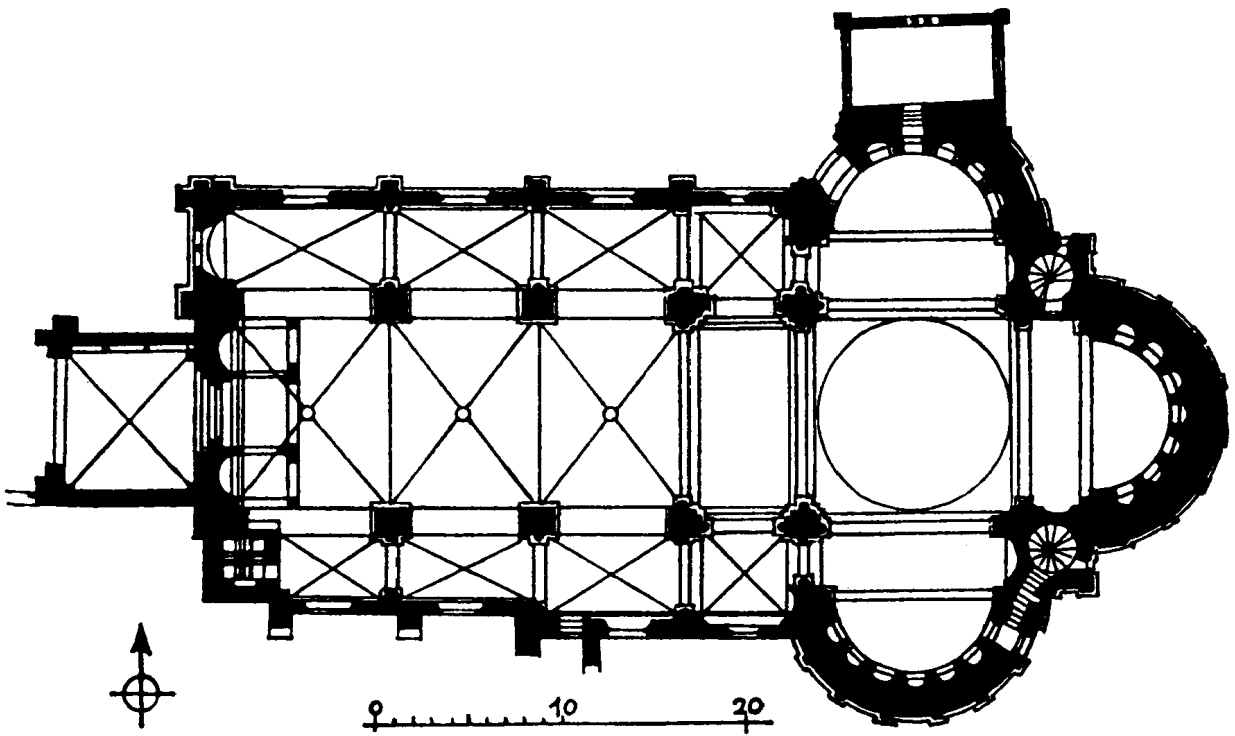


図30 グロス聖マルチン 平面

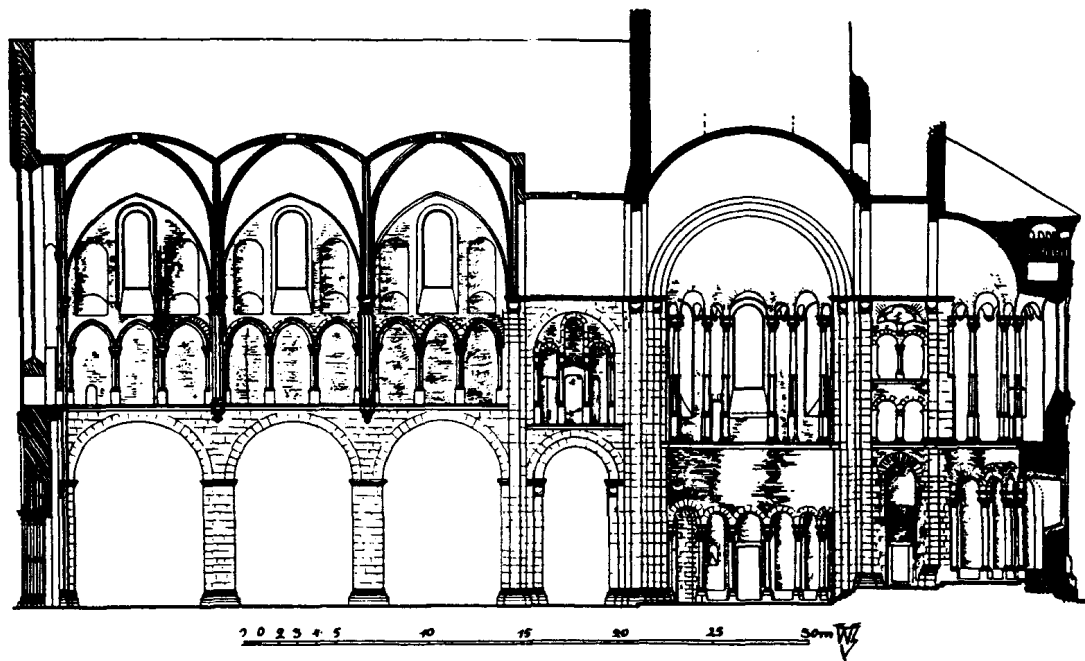


図31 グロス聖マルチン 立面



図32 グロス聖マルチン 身廊北西部

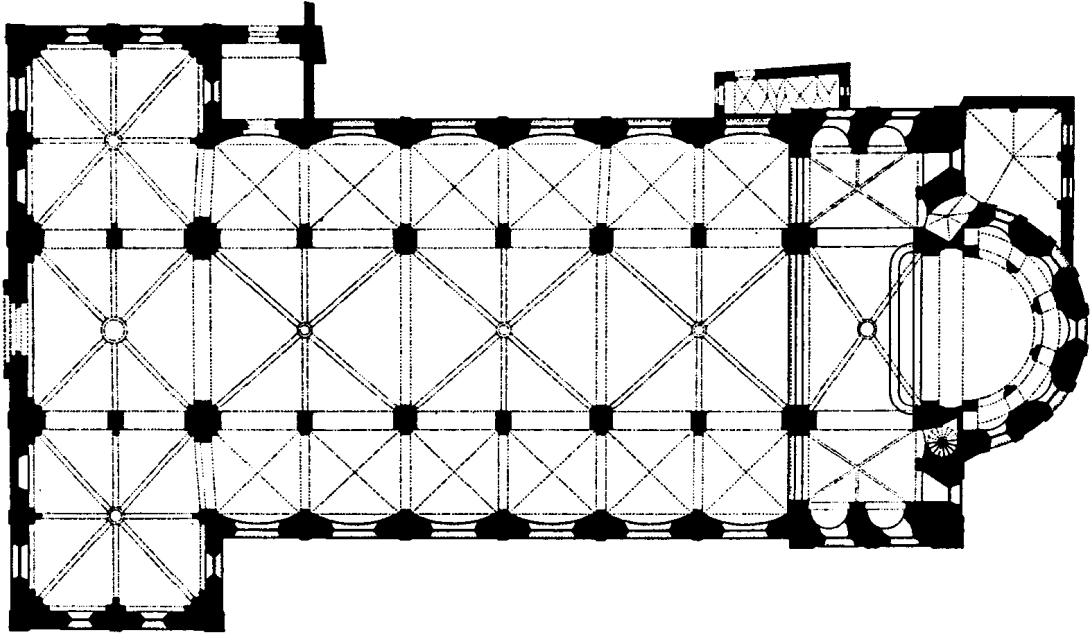


図33 聖クニベルト 平面

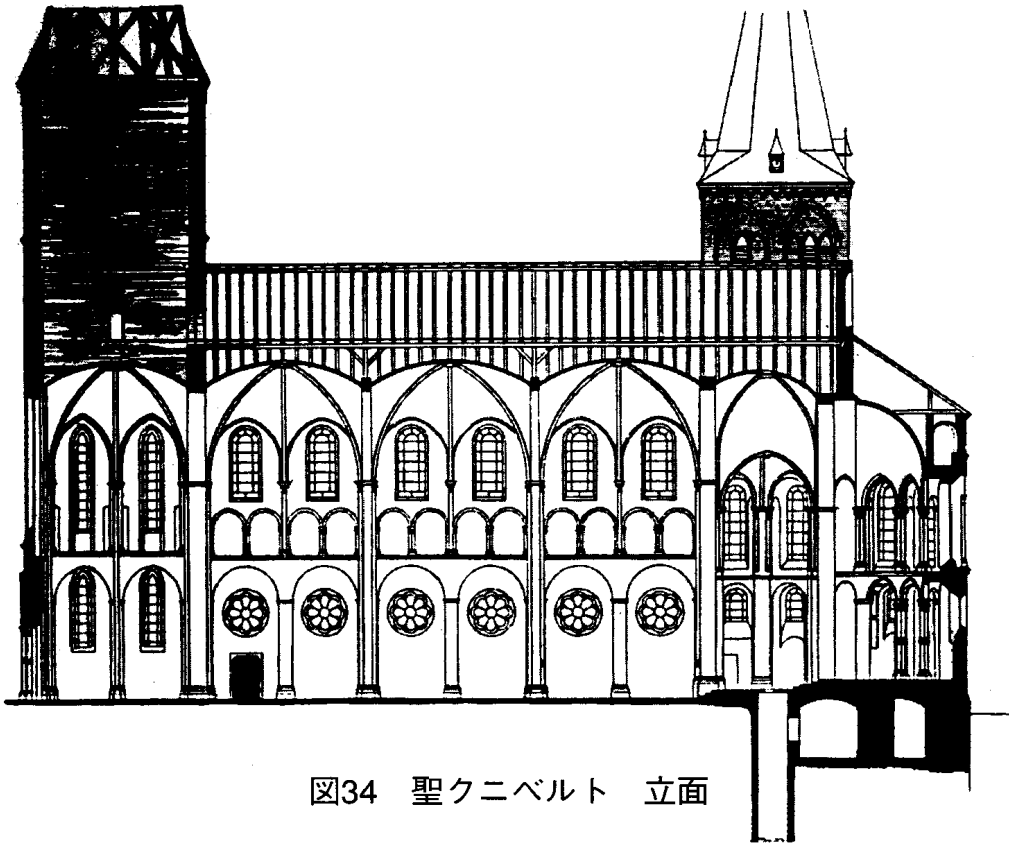


図34 聖クニベルト 立面

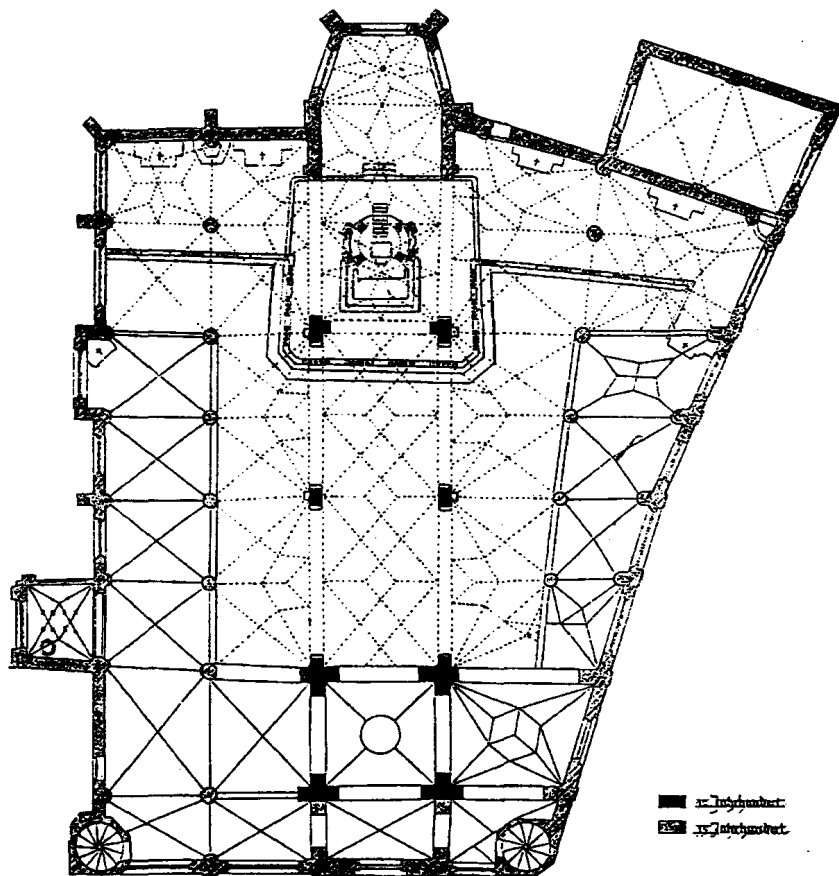


図35 聖コロンバ 平面

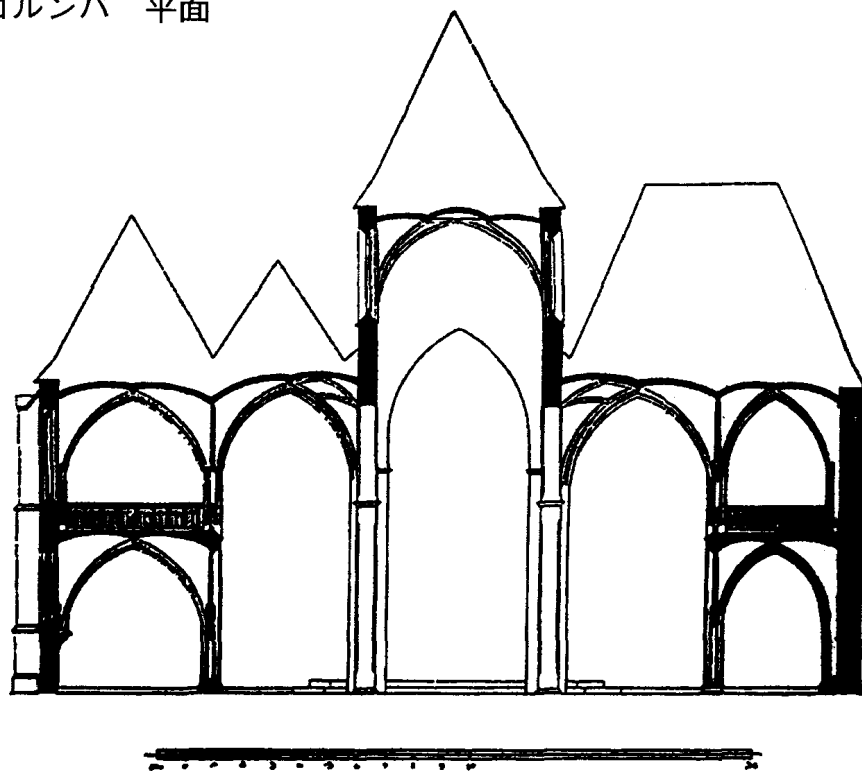


図36 聖コロンバ 身廊断面



図37 聖コルンバ 内部南東へ